

二〇二一年一月一八日(参加者一九名)

大雪に眠る一村無音界	マネキンは素足見せそめ日脚伸ぶ	虎落笛猫の奇声もその中に	目出度さの土くれつけて福寿草	水仙の袴大事と活けにけり	林立のビル影絵めく冬茜	梅白し聖書講座の通ひ路に	一鉢に窓辺華やぐシクラメン	玉の日の浦にたゆたふ百合鷗	初詣人に埋もれし夫を追ふ	神の畑広がる伊勢路日脚伸ぶ	竹藪の怒涛をなせる大北風	中天の冬満月と出勤す	風紋の残りしままに川氷る	大寒波洗濯物はせんべいに	探梅や見知らぬ人に会釈して	初暦真っ白な日の動き出す	さざ波の揺らぐ岸边に鷺凍つる	静けさに朝戸を繰れば雪世界	
宏	"	"	"	きづな	"	"	"	ひかり	"	"	明日香	"	"	百	"	"	せいじ	"	"
虎														合					

葉牡丹のモザイク画めく冬茜

"

枯れ色の見ゆる棚田の雪間かな

ぼんこ

雲間より鶯急降下する枯野

"

得手の娘と不得手の母と毛糸編む

有香

探鳥のレンズ合はず手悴めり

"

初明り六甲の嶺々白変す

わかば

風邪癒えて朝のみそ汁うまかりし

つくし

寒月に届けとばかり詩を吟ず

うつぎ

雨いつか小雪と変はる帰り路

よし子

餅花に肩の触れもし木戸くぐる

菜々

百選の寒九の水とてコーヒーに

かれん

今もって皿割るる音阪神忌

満天

子らの声寒九の空へ突き抜ける

はく子

定例会みのある選

二〇二一年一月一八日(参加者一九名)